

市川森一

ダウンタウン
物語 後篇



ダウNTOWN物語

後篇

市川森一



筑摩書房

著者略歴

市川森一 (いちかわ しんいち)

1941年、長崎県諫早市生まれ。日本大学芸術学部卒。

1979年、「黄金の日日」(歌舞伎座・上演)の戯曲により大谷竹次郎賞受賞。

1981年、「港町純情シネマ」(TBS)「チャップリン暗殺計画」(日本テレビ)で芸術選奨文部大臣新人賞受賞。「十二年間の嘘」(TBS)で1982年度芸術祭テレビドラマ部門優秀賞受賞。1983年、「淋しいのはお前だけじゃない」(TBS)により第1回向田邦子賞、第15回テレビ大賞、第20回ギャラクシー賞受賞。

おもな作品：「黄色い涙」(NHK銀河テレビ小説)、「傷だらけの天使」(日本テレビ)、「新・坊っちゃん」(NHK)、「幻のおどろ園」(NHK銀河テレビ小説)、「グッドバイ・ママ」(TBS)、「黄金の日日」(NHK大河ドラマ)、「失楽園'79」(NHK土曜ドラマ)、「風の隼人」(NHK)、「港町純情シネマ」(NHK土曜ドラマ)、「失楽園'79」(NHK土曜ドラマ人間模様)、「ダウンタウン物語」(日本テレビ)、「失楽園'79」(NHK土曜 っているか) (NHK土曜ドラマ)、「淋しいのはお前だけじゃない」(NHK土曜 「誰か」が私を愛してる」(TBS)、「山河燃ゆ」

ダウンタウン物語 (後篇)

1984年 8月10日 初版第1刷発行

著 者 市川森一

発 行 者 布川角左衛門

発 行 所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2—8

振替東京 6—4123 Tel. 291—7651(営業) 294—6711(編集)

郵便番号 101—91

印刷・理想社印刷所 製本・積信堂

0096—80246—4604 ©SHIN'ICHI ICHIKAWA, 1984

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

第9回	ストリート・ファイト	3
第10回	香港から来た女	31
第11回	もし愛がなければ	57
第12回	地獄へのメッセージ	83
第13回	夜霧のブルース	109
第14回	復活祭	135
最終回	OH! HAPPY DAY	163
変幻自在のわがドラマ	あとがきにかえて	197

ダウンタウン物語（後篇）

スタッフ

監	キ	リ	ス	ト	イ	修	教	演	出	出	吉	野	洋	演	出	祖	父	江	信	太	郎	音	楽	荒	木	一	郎	美	術	平	井	堯	技	術	伊	藤	邦	雄	照	明	伊	藤	正	雄	音	声	戸	田	幸	夫	カ	メ	ラ	片	野	憲	司	効	果	宮	下	博	行	演	出	補	雨	宮	中	山	秀	一	矢	野	悦	子	林	田	秀	彦
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

キャスト

風	見	呼	子	桃	井	か	お	り	塩	谷	伊	作	川	谷	拓	三	石	毛	月	世	*	市	原	悦	子	乾	隆	田	村	亮	白	浜	健	佐	藤	浩	市	西	本	政	美	に	し	き	の	あ	き	ら	マ	ッ	キ	ー	赤	塚	真	人	坂	本	刑	事	桜	井	セ	ン	リ	勝	山	刑	事	小	林	稔	侍	杉	田	雪	江	中	原	早	苗	山	本	幸	子	南	風	洋	子	村	松	宮	子	原	知	佐	子	山	口	貞	子	小	夜	福	子	上	海	竜	水	島	道	太	郎	高	階	礼	二	*	平	田	昭	彦	池	上	純	一	郎	篠	田	三	郎	リ	タ	夏	木	夏	目	雅	子	風	見	蘭	子	岡	田	茉莉	子
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---



第9回

ストリート・ファイト

悲愴なパンチを相手の顔面に浴びせる伊作の顔は、ウルフに変身している。

○埠頭（夜）

霧の漂う夜の海から、女を乗せた舢舨が影絵のように現れる。

女は密航者。肩に掛けたトレンチコートの中はチャイナ服。荷物はショルダーバッグに、化粧箱。名は、リタ・夏木（24）。

舢舨が棧橋へ舷を寄せ、リタと彼女を案内してきた白人の三等航海士が埠頭へあがる。

リタが、ドル札（千ドル程）を差しだす。

英語の会話に字幕スローパーで――、

航海士「（英語）金はいらねエ」

リタ「（英語）なにが欲しいの？」

航海士「（英語）おれは花が好きなんだ」

リタ「（英語）私も花は好きよ」

航海士「（英語）とくに、けしの花のかおりはたまらねエ」

リタ「……（睨む）」

航海士「（英語）化粧箱の中の白い粉を、山分けといこうじゃないか」

リタ「（英語）知ってたの」

航海士「（英語）香港に逆戻りしたくなかったら、すなお

に出しな」

リタ「（英語）化粧箱の中にはないわ。肌身につけてるの」
航海士「（英語）見せてもらおうか」

リタ、艶然と微笑うと右脚を手すりにひっかけて、太股に手をすべりこませる。

みつめる航海士の眼。

瞬間、リタの手がガードルにはさんでいたコルトをだす。

航海士ビクツとなる?!

霧笛！

発砲！ 二発!!

胸板を射ち抜かれて棧橋から舢舨の上に転落する航海士
リタ「……」

死体を見届け、コルトをコートのポケットに放りこみ、
荷物を持ち直して、足早に立ち去る――謎の女・リタ。

霧の波止場にテーマ曲。

○西港町教会・庭

タイトル

第九回「ストリート・ファイト」

キャスト

スタッフ

早春日和の庭で――、

少ない洗濯物を干している、新妻の呼子。

居間では――、

伊作がキャンバスに『聖書を読む呼子』を描いている。

新婚家庭の、なに気ない平和な午後のひととき。

○日曜日――同・礼拝堂

日曜礼拝が行われている。

オルガンに坐り、説教中の伊作を温かく見守る姿も板についてきた牧師夫人の呼子。

しかし、列席者は、相変わらずまばら。

居眠りしている貞子に悪ガキたち。

それと、見知らぬ男（週報を見ている）が一人。

伊作「こころの貧しい人たちは幸いである。天国は彼らのものである。主キリストが山上の説教で親しく語りかけてくださったことばです。貧しい人たちは幸いなのです。」

これは強がりでも負けおしみでもありません。貧しいものはおたがいにその相手の傷ついた心がわかります。貧しいことのつらさがどんなものであるかも自分のこととして理解出来ます。貧しい者同士は何の儀礼も、何の飾りもいりません。ありのままの姿でふれ合うことができます」

隆が現れる。

呼子「（ギクリとなる）?!……」

ゆっくりとベンチに掛け、聖壇の伊作を品定めする隆の目。

伊作には、隆が何者であるか判らない。

伊作「主キリストは馬小屋でお生まれになり、人々からあざけられながら十字架につかれました。そのご生涯は貧しさを絵に描いた様な日々の連続でした。キリストはひもじさをご存知です。かわきをご存知です。貧乏をご存知です」

隆と呼子の視線が合う。

微笑いかける隆。

呼子は、目を伏せる。

呼子「……」

○同・表

「さようなら」

貞子と子供たちが伊作に見送られて帰っていく。

見知らぬ男もでてくる。

伊作「(男に)初めてのかたですね。また、いらっしてください」

男、逃げるように立ち去る。

伊作(？)

貞子「(伊作の袖を引き)奥サンもオルガンがだいぶ上手うまくなつたわネ」

伊作「(嬉しく)はい、まア、なんとか」

貞子「(首をまわして)ああ、いい気持で寝たワ。もう、春ねエ(と、去る)」

○同・礼拝堂

伊作が戻って来る。

鬼ごっこしているアリスとチビが伊作に抱きついてくる。

伊作「おottootto」

アリス「先生、ピクニック行こう！」

チビ「ピクニック行きたい」

伊作「いいねエ、三溪園あたりにみんなで行くか」

アリス「いまから行こう！」

伊作「来週だな。まだ、チョット寒いからネ」

アリス「来週、きつとよ」

伊作「きつと、きつと」

アリスとチビ、「サヨナラ」と駆け出していく。

伊作、まだベンチに坐っている隆に、

伊作「ようこそいらっしやいました。ここには、初めてでいらっしやいますね？」

隆「お邪魔をするのは二度目ですよ。一度は、あんたが留守のときにね。おい、呼子、俺に牧師さんを紹介してくんないか」

伊作(？)

オルガンに釘づけの呼子。

呼子「(蒼白で立ち上がる)……」

隆「(はじめて視線を伊作に向けて)俺のことは、とうにご存知でしょう」

伊作「(ハッと察して)……隆さんですか」

隆「呼子がすっかりお世話になっちゃまって……（呼子をチラリ）おまえ、ちよいと、やつれたな」

呼子「帰って……」

隆「俺は、礼拝うけに来たんだぜ」

呼子「礼拝は終わったわ」

隆「ついにて、忘れ物ンも持ってきてやったぜ。（と、紙袋をみせて中からネグリジェをつまみだし）ネグリジェに、

化粧品だ」

呼子「下種ッ」

隆「（伊作に紙袋を）さア、どうぞ」

伊作「……（受けとり）わざわざありがとう。居間へ、どうぞ」

呼子「入れることないわ」

伊作「（ドアを開け）どうぞ」

隆、入る。

伊作「（呼子に）あなたも……」

呼子、渋々、オルガンを離れて伊作の傍へきて、

呼子「（伊作の腕をギュッと握りしめる）……」

伊作「……（判つてるといふ目で、呼子をうながす）」

呼子を先に入れてドアを閉める。

○同・居間

描きかけの『聖書を読む呼子』の油絵。

隆がきて、眺める。

台所に立つ伊作と呼子。

隆「牧師サン、絵をやるんですか」

伊作「下手の横好きで」

隆「コレは、呼子ですね。……呼子も、どうせなら、おまえ、ヌードかいてもらやいいのによ。ヌード写真撮らし

たこともあるんだから、どうってこたないだろうが」

呼子「あんたねッ」

伊作「（制して）お茶をお願いします」

呼子「こんな人にお茶なんかいりませんッ。どうせ、いや

がらせに来たんだから」

隆「そう突っかかるなよ（煙草に火をつける）」

呼子「煙草吸わないでッ。私、やめてんだから」

隆「おまえが禁煙？ そりゃア感心だ（うまそうに吸う）」

伊作「お茶をいれてください」

呼子「……（渋々、流し台にいく）」

伊作「どうぞ、お掛けになって」



隆、椅子に腰を下す。

伊作、絵皿をテーブルに置き、

伊作「灰皿に。……（掛けて）いつかは、お会いして、お話し合いの機会をもちたいと思っておりまし

隆「いけね」

伊作「？」

隆「ボタンがとれかかってやがる。（と、背広のボタンを引っぱる）……取れそうだな。……そお、こっちも早く会いたかったね」

伊作（声）「あなたには、お知らせしておかなきゃならな

いことがありますね」

隆（声）「ほう。なんです」

台所——呼子、ヤカンの湯を沸かしながら耳をすま

伊作（声）「私たちは、結婚をしました」

呼子「（ヤッタ）！」

伊作「私と呼子さんは、すでに夫婦です」

隆「……（意外の思い）」

伊作「ですから、あなたにも、今後はそのおつもりでおつき合いをお願いしたいのです」

隆、内心のショックを隠して、

伊作、絵皿をテーブルに置き、

伊作「灰皿に。……（掛けて）いつかは、お会いして、お話し合いの機会をもちたいと思っておりまし

隆「いけね」

伊作「？」

隆「ボタンがとれかかってやがる。（と、背広のボタンを引っぱる）……取れそうだな。……そお、こっちも早く会いたかったね」

隆「……背広のボタン、奥さんにつけ直してもらってもか
まいませんかネ」

伊作「?……いいですとも。……(台所に) 呼びさん」

呼びきて、

呼び「(キッパリ) お断りよ」

隆「結婚式、呼んでくれたら駆けつけたのによ。……お祝
いもって」

呼び「あんたのごたくなンか聞きたくない。もう、帰って
ッ」

伊作「ボタンぐらいつけてあげたら」

呼び「嫌ですッ」

隆「(ムツとなる) ……俺もな、ただのひまつぶしで来た
わけじゃねえんだ。……これでも仕事で来たンだけ。

(内ポケットから証書のようなものを抜きだして) まあ、
こいつを見てもらいましょうか」

伊作、うけ取ってひろげて見れば、九百五十万円の借
用証書のコピー。

伊作、呼び「?!」

伊作「これは……」

隆「そお、あんたらが闇ドルのサチコから借りた、九百五

十万の借用証書でき。コピーなのが残念ですがネ」

呼び「こんなもん、なんであんたが……」

隆「サチコから雇われたんだよ。取り立て屋にね」

二人「?!」

隆「そんなわけで、期限の四月十九日までは、嫌でも、チ
ョクチョク寄せてもらいますよ。なんせ、こっちもそれ
が仕事なもんでネ」

呼び「あの金貸し女にいつ取り入ったの。ばかよ、あんた
……」

隆「俺を寄せつけたくなかったら、早いとこ、きれいに払
っちまうんだな。また、お邪魔しますよ(と腰を上げ
る)」

伊作「……」

○同・表

隆が、背広のはずれかかったボタンを気にしながら出
て行く。

呼びが出てきて、

呼び「どうして、つきまとうの……」

隆「哀しく振り返る) ……忘れるなよ。おまえの命は、

復活祭までだ。約束だぞ」

呼子「そんなに、私が憎いの……」

隆「じつとみつめて」……」

無言で立ち去る。

呼子「……」

○同・台所（夜）

粗食の夕飯（御飯とつけもの、みそ汁）をとっている

呼子、伊作。

呼子「先生、二階に、先生の描いた絵がありますね」

伊作「呼子さん……その、先生という呼び方はボツボツ

……」

呼子「エ？　そうですね。……でも、あの、なんと呼び

したらいいんでしょうか……」

伊作「……名前で、結構です」

呼子「……イサク？」

伊作「はい……」

呼子「伊作ッ。……そうネ、夫婦なんだもの。先生はおか

しいのよネ。これから、伊作ッて呼びます」

伊作「あの、呼び捨ては、少々……」

呼子「そうか、伊作サン？」

伊作「はい」

呼子「伊作さんね。信者さんたちの手前もあるし、呼び捨てはマズイわよね。伊作さん……ハイ、判りました」

伊作「二階の絵は、船の上で描いたんですよ。半年前、ア

メリカからこっちへ還ってくるときの。……あの絵が何

か？」

呼子「私ネ、一人知ってる画商がいるの。画商に見せちゃ

いけません？」

伊作「売れませんか、あんな絵は……」

呼子「持ってってもいいですか？　ために」

伊作「持っただけ無駄だと思えますけど、あれはねエ

……（と、言いながらも食卓を立てて）

いそいそと二階へ駆け上がっていく。

呼子「……（一計あり）」

十号のキャンバスをかかえて下りてくる伊作。

伊作「コレ、別に売るつもりで描いた絵じゃないから……」

椅子にたて掛けて、鑑賞させる。

伊作「暗いでしょう」

絵の前に立つ呼子。

呼子「船の上で？」

伊作「甲板から、アメリカ人の御婦人が日傘を海に落としてしまつてね……」

絵——空とも海ともつかぬ蒼い空間の彼方に、小さく、一本の傘が浮いている。

伊作（声）「この傘がなかなか海に落ちなくてね。……風にのつて、いつまでも空に浮いてる姿が、悲しくて、淋しくて……」

海と傘の絵に、伊作の遠い日の恋人……若い清楚な女（リタ）の横顔が浮かび上がってくる。

伊作「……」

○翌日——同・礼拝堂

電話中の呼子。

呼子「ママんとこに入りにして、あのなんとかという中国人の画商がいるでしょう。……値踏みしてもらうだけでもいいんです。……でも、見せたらきつと買いたくなると思いますけど。……あ、そ、じゃ、これからすぐ伺いますッ」

○同・表

ふる敷に包んだ絵を小脇にかかえて急いで出て行く呼子。

○荷揚場

昼飯時の仲仕たち。

出前のカツ丼を喰う健と、焼きおにぎりの伊作。健「（新聞を見ながら）ヘエ、おととい、その橋桁はしげたに浮

いてたのは、アジャ丸のサードメイトだつてよ。密航者の手引きして殺されちまったんだと、馬鹿だよなア」

黙々とおかずなしのおにぎり食べている伊作。

健、カツ丼の肉をひと切れ伊作にやる。

伊作「あ……」

健「献金だよ」

伊作「わるいね」

健「おかずもなしに、米だけよう喰うよ」

伊作「お金ツていうのは、たまないもんだね」

健「金、ためてんのかよ」

伊作「ためなきゃいけないんだけど、なかなかたまないよ」

健「金儲けしたきや、世話するぜ」

伊作「なにを？」

健「本気で金をためたいならサ、やってみるかい」

伊作「怖い仕事なら嫌だよ。まだ、栈橋に浮かびたくはないからね」

健「牧師さんの左があれば、なんにも怖いこたないサ」

伊作「左？」

健「今夜、つれてってやるよ」

○シードラゴン・表

昼下り――、

政美が帰ってくる。

○同・オフィス

月世が電話（多分、情報屋と）している。

月世「スリーナインといえば、九九・九パーセントの純性ヘロインじゃないの。スリーナインを百グラムも。一億はくだらないじゃない。この頃の若い娘はいい度胸してるわ。またなク新し^ネい情報^ダがはいったら知らせてちょうだい。どうもネ（切ってラーメンにもどる）」

政美がきて、

政美「香港のクラブじゃ、樓泉^{ろうせん}と呼ばれた子猫チャンらしいんですがね。本名は判りません」

月世「子猫チャンが香港のシンジケートから持ち逃げしてきた麻薬^{マダ}は、オピウム・ナンバー4だってヨ」

政美「スリーナイン？（口笛）」

その部屋の片隅には、呼子が、油絵を抱いてジッと待たされている。

肩身のせまい出戻り娘の風情。

呼子「……」

マッキーが威勢よく入ってくる。

マッキー「ヘイ、ハニー！」

呼子「（上目づかいでペコリと）こんにちは、マッキー」

マッキー「あそびに来たの？」

月世「マッキー！」

マッキー「ヘイ、ヘイ、アジャ丸のサードメイト殺^やったのは、やつぱり、香港の子猫チャンですね」

政美「そんなこたア、とうに判ってんだよ」

月世「隠れ処^がはどこ？」

マッキー「それが誰も知らないんですヨ。闇ドルのサチコ